

○ホラシノブの新変種 (伊藤 洋): Hirosi Ito: A new variety of *Sphenomeris chusana*

志村義雄氏から変わったシダの実物と生態写真をいただいた。産地は静岡県引佐郡引佐町すなわち浜名湖の北側の地で、西ノ平一兔荷間山道斜面の草のはえているやや乾燥した場所、写真には付近にコシダトシダの小さいものが多数写っている。一見してホラシノブの変わり物らしいことはわかるが、図のように葉面の形や切れ方が大いに違っている。葉面は長だ円形や卵形で、先は円形。羽片は広卵形ないし卵状ひし形で円頭、2回羽状に中〜深裂し、分かれの回数および小羽片・裂片の数が少なく、裂片は扇状に広がり互いに重なり合っている。葉質はホラシノブよりも薄い。葉柄を含めた葉の長さは 15 cm 以下で小さく、幼形のようにも見えるが、胞子のう群もできており、志村氏によると胞子も正常形であるという。また生態写真によると 40 枚ほど葉の出た大株のそばに少し離れて数個の小株が写っているが、これらも同じような葉をつけている。(図の a は大株の葉、b は小株の一つを志村氏が静岡市で栽培したものから採った葉である)。志村氏はこれらの小株は親の大株から胞子によって繁殖したものと解釈しておられる。このような点から考えてこの変わり物は偶発的なものではなく、一変種であると思われる。なお根茎・鱗片・毛・葉脈・葉縁・胞子のう群などはホラシノブのそれと一致する。ホラシノブにはこのような変種は記録されていないので新変種として発表する。

このシダは志村氏が故佐竹健三氏と共に上記の場所で植物調査中、佐竹氏によって発見されたもので、その時両氏によってウチワホラシノブの名が与えられている。学名の変種名には発見者の名を残すことにする。

*Sphenomeris chusana* (L.) Copel. in Bishop Mus. Bull. 59: 69. 1929.

var. **kenzoana** H. Ito, var. nov.

A var. *chusana* differt, frondibus minoribus, laminis oblongis vel ovatis apice rotundatis, pinnis late ovatis vel ovato-rhombicis bipinnatifidis vel -partitis, lobis flabelliformiter expansis vel confertis, sed sporis normalibus.

Hab. Nishinotaira—Tonga, Inasa City, Shizuoka Pref. (Kenzo Satake & Yoshio Shimura, Aug. 22, 1968—Holotypus in Herb. TI).

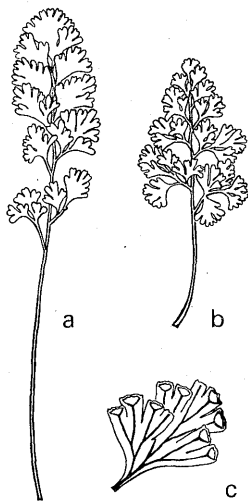


Fig. 1. ウチワホラシノブ. a, b, 葉 (別株)  $\times 0.5$ . c. 羽片  $\times 1$ .

In Fig. 1. *a* is a frond ( $\times 0.5$ ) of the holotype, *c* is one of its pinnae ( $\times 1$ ), and *b* is a frond ( $\times 0.5$ ) of a plant transplanted to Prof. Shimura's garden from the type locality by him in 1974, which was considered as a descendant of the plants in question.

(東京都文京区 [redacted])

○日本と台湾のフシグロ類 (大井次三郎・大橋広好) Jisaburo OHWI & Hiroyoshi OHASHI: New combinations in Japanese and Formosan *Silene* (Caryophyllaceae)

Chowdhuri (in Not. Bot. Gard. Edinb. 22: 221-278, 1957) はフシグロ属 *Melandrium* Roehl. をマンテマ属 *Silene* L. に含める見解を発表した。この論文では 1) *Silene noctiflora* など多くの種類において子房壁の有無に変異があるとされていること、2) センノウ属、*Petrocoptis* およびマンテマ属 *Heliosperma* 節では隔壁は子房の成長に従って消失する種類が多いことなどを根拠として、従来フシグロ属とマンテマ属を区別する特徴とされていた子房隔壁の有無の重要性を否定している。この点に関しては更に解剖学的に充分両属を比較する必要を感ずるが、近年広義のマンテマ属を認める意見が多く、最近の例では Flora Europaea Vol. 1 (1964) の中ではマンテマ属で統一されており、我国では従来のフシグロ属に含まれると思われる新種アオモリマンテマがマンテマ属として記載された。我々もこの見解を採用し、日本と台湾に知られている従来のフシグロ属について以下のような新組み合わせを発表することとした。なおここに取上げた日本産の種類の一部については近く出版される大井の日本植物誌増補版にもこれらの学名を採用したので、その正式発表とする。

1) *Silene firma* Sieb. et Zucc. f. *pubescens* (Makino) Ohwi et Ohashi, comb. nov. ケフシグロ

*Melandrium apricum* (Turcz.) Rohrb. var. *firmum* (Sieb. et Zucc.) Rohrb. f. *pubescens* Makino in Makino et Nemoto, Fl. Jap. 1002 (1925). *M. firmum* (Sieb. et Zucc.) Rohrb. f. *pubescens* (Makino) Makino, Nippon-Shokubutsu-Dzukan 530 (1925); in Makino et Nemoto, Fl. Jap. ed. rev. 294 (1931)—Ohwi, Fl. Jap. 504 (1953); ed. Engl. 434 (1965); ed. rev. 586 (1965)—Kitamura et Murata, Colour. Ill. Herb. (Choripetalae) 259 (1964), ut f. *pubescens* (Makino) Ohwi—Hatusima, Fl. Ryukyus 273 (1971).

2) *Silene keiskei* Miq. オオビランジ

i) var. *minor* (Takeda) Ohwi et Ohashi, comb. nov. ビランジ

*S. Keiskei* f. *minor* Takeda in Bot. Mag. Tokyo 24: 63 (1910), ut f. *minor* Maxim. *Melandrium Keiskei* (Miq.) Ohwi var. *minus* (Takeda)